

園内研修のプロセスから(3)

—指導計画にみる保育者自らの保育構造自覚化の可能性—

入江 礼子・内藤 知美

(鎌倉女子大学・同幼稚園)

1. 研究の目的

Y幼稚園では2001年度から「保育の見直し」を行なっている^{i, ii}。Y幼稚園での見直しは保育研究者である併設大学教員2名(筆者ら)が園長・副園長というかたちではあったが直接園の職員として内部に入ったことから始まった。ところで近年の「保育の見直し」過程の実践の一部が研究者との共同研究の形でまとめられている。横浜学園付属元町幼稚園での実践や長野女子短期大学付属幼稚園の実践^{iii, iv}などである。これら研究に比してのY幼稚園での実践研究の特色を挙げるならば保育研究者が実践の外部に位置するのではなく、その実践の一端を担う内部の存在であるということになる。そのプロセスの3年目にあたる今回は園内研修のなかで検討を続けてきた指導計画(Y幼稚園の場合は週日案を採用しているので以下週日案と記す)の変遷から、各保育者が週日案のなかに自発的に立ち上げた項目の検討を行なうことで保育者自らの保育構造自覚化の可能性を考察していく。

2. 研究の方法及び資料

Y幼稚園の保育実践を事例とし、園内研修議事録と週日案及び筆者の保育後記録を資料とし考察を行なう。

期間：2001年4月～2003年12月

Y幼稚園のプロフィール：

表1 園児数及び担任数

	3歳児	4歳児	5歳児
01年度	6 (1)	28 (2)	26 (1)
02年度	12 (1)	16 (1)	27 (2)
03年度	20 (2)	31 (2)	22 (1)

☆()内は担任数

表2 一日の流れ(2003年12月現在)

8:40～9:00	順次登園(バス登園を含む) 着替えの後、保育者の環境設定のもと、自由な活動及び保育者の設定した活動(クラスや日によって予定は違う。)
11:10頃	片付け
11:30頃	お弁当 その後自由な活動
13:00頃	片付け
13:20頃	帰りの集まり
13:50頃	着替え
14:00	降園

3. 内容及び考察

(1) 週日案フォームの変遷

① 週日案I^v(2001年4月から2002年3月)

01年度は筆者ら2名が幼稚園兼任となった。主任(50代保

育歴19年)と担任(4名:30代保育歴7年、20代保育歴5年・3年・2年)は以前からY幼稚園で保育者をしており、主任以外は他園での経験はなかった。01年度以前、Y幼稚園では指導計画は当時のフォームに添って立案することはあったが園全体の園内研修そのものがなかったため保育者間で検討することはなかったという。立案はされるものの評価・検討はなかったことになる。週日案Iは筆者らがトップダウンの形で提案した。このフォームはこの年度に改訂されることはなかったが、園内研修での話し合いから「環境図に子どもの位置・活動・かかわり」を入れ「先週の子どものとらえと反省」を入れ込む努力を行なった。これは保育者が週日案立案の際に保育後の反省が重要であると意識されるきっかけとなった。しかし実際の保育にまで変化が及ぶまでには約半年を要した^{vi}。その後特に3歳児・4歳児の担任を中心に保育環境を整える努力や保育の流れを柔軟にする努力が行なわれた。しかし5歳児クラスとの動きの違いも顕著になり、子どもたちを園全体でチームとして行なう必要性も感じ始めるようになった。

② 週日案II^{vii}(2002年4月～2002年6月)

02年度には保育者の入れ替わりがあった。20代保育歴3年の保育者が去り、20代他園経験3年と20代院卒新任が着任し、40代他園経験及び障害を持つ子どもの保育経験を合わせて9年のフリー保育者が加わった。週日案Iを使った反省を踏まえて週日案IIを筆者らから提案した。「反省・記録」欄を設けたことが大きな変更点であったが、週はじめの園内研修では記録欄が白紙の上、次週に前週の記録を検討するだけの時間を捻出することができなかった。またチーム保育の必要性から入れ込んだ「他の保育者との連携」欄も最下段にあったためかあるいはその重要性が担任保育者の間では認識されていなかったためか、この欄もまた空白であることが多かった。

③ 週日案III^{viii}(2002年6月～2003年5月)

週日案IIがうまく機能しなかったこともあり再度改訂を行なった。週日案IIで独立させた「環境図」を再び紙面に組み込み、「他の保育者との連携」欄を紙面の中心に近い位置に移動した。特に異年齢での交流が活発化したこともあって、この連携欄の必要性が高まったためである。またこの欄は園内研修時に当時まだ発言の少なかった若手保育者からの提案の場としての機能を持つようにもなった。

④ 週日案IV(2003年6月～現在)

03年度にも保育者の入れ替わりがあった。主任と保育歴9年、及び進学で保育歴4年の保育者が去り、20代他園経験4年と20代院卒新任が新たに加わった。年度当初は

週日案Ⅲをそのまま使用した。しかし学期初めの慌しさが一段落し始めた5月下旬の園内研修で新任保育者2名から以下の意見が出された。「着任して1ヶ月半、週日案Ⅲのフォームを使ってみたが、書くのに時間がかかる割には使いにくい。『先週の幼児の姿』『予想される子どもの姿』は環境図を書く段階でも考えているので二重手間になるⁱⁱ。」担任保育者からフォーム改訂の提案があったのは初めてのことであった。提案者2名主導の話し合いの結果、次週からは「行事と一日の流れ」欄以外は空白とし、「週のねらいと内容」「他の保育者との連携」欄は共通に残し（但しその紙上比率は各保育者に任せる）、残りはすべて白紙の環境図とすることになった（図1参照）。

（図1）週日案Ⅳ（クラス名 03年 月 日～ 月 日）

日	日(月)	月(日)	日(月)	日(月)	日(月)
行事					
一日の流れ					

（2）週日案Ⅳの特徴

週日案Ⅰは筆者らがトップダウンで提案したもの、Ⅱ、Ⅲは園内研修で担任保育者からの意見や園としての方針を勘案して同じく筆者らが提案した。しかしⅣは新任保育者2名からの提案で作成された。ボトムアップで作成されたという意味でY幼稚園にとっては画期的であった。

① 項目の個性化

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの項目は話し合いの過程があったとはいえ担任保育者にとっては園長・副園長がトップダウンできめたものであったためか、その項目を超えて作成するという発想はできにくかったと思われる。それはⅣの形式になってから以下のような項目が次々にそれぞれの保育者の週日案にあらわれるようになったことから分かった。

その項目の主なものは次のとおりである。

i) 保育者の課題・目標

新任保育者から提案された。その後他の担任保育者にもこの項目を立てることが広がっていった。

ii) 子どもたちの気になる事項

新任保育者から提案された。その後他の保育者に「子どもの様子」などの項目に形を変えて広がっている。

iii) 子ども関係図

他園経験4年の保育者から提案された。この関係図も他の保育者に波及しかなり頻繁に使われる項目となっている。

iv) 子どもの様子・クラスの様子

経験6年目の保育者から提案された。関係性よりも子ども個人に注目した項目立てであり、その後の他の保育者への波及という点では子ども関係図ほどの頻度はない。

v) クラスの目標・クラスの課題

経験2年の保育者から提案された。他の保育者も必要に応じて使うようになっている項目である。

② 共通作成項目と個人作成項目

Ⅳを作成する際には以前にまして複数担任クラス（3歳児、4歳児）では共通に作成する部分（行事・一日の流れ・週のねらいと内容・他の保育者との連携欄）の相談を金曜日の保育終了後行なう姿が目立ってきた。環境図はその後保育者が個別に作成するようになった。この部分では保育者が今の子どもたちのとらえや自分の保育者としての力量に向きあいながら作成する結果、より個性的でかつクラスの実態が分かりやすい週日案が作成されるようになった。

③ 園内研修の話し合い内容の変化

週日案がそれぞれのクラスの特徴と各保育者の個性が表れたものになってきた結果、園内研修では話し合いの内容に変化がみられるようになった。特にクラスの実態が分かりやすいものになったため、それは個々に読めば了解できることがわかった。そこで話し合いは筆者らの提案による「他の保育者との連携」欄の確認とクラスを越えて活動する子どもや、今保育者が悩んでいる子どもや、親とのかかわりなどに特化した話し合いが進むようになった。

4. まとめと今後の課題

週日案Ⅳになってからその作成は以下の①～④のプロセスで進み、よりシステムティックになった。

- ① ティームを組んでいる保育者との話し合いと共通項目の作成
- ② 各保育者の課題や個性を入れ込んだ環境図部分の作成
- ③ 園内研修における連携事項の確認
- ④ 各保育者が向き合っている課題への踏み込んだ話し合い

今後は特に個人で取り組む環境図が以前に増して各保育者の現在の状況を反映できるものになったことを踏まえて、普段は意識化あるいは文字化されない保育者の内なる保育構造を園内研修での週日案の検討を通して行なっていく。

（脚注）

ⁱ 入江礼子他「園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相—特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として—」鎌倉女子大学紀要第9号 pp1-10 2002年3月

ⁱⁱ 入江礼子他「異年齢交流を支えるティーム保育の検討—指導計画の変容を手がかりとして—」鎌倉女子大学紀要第10号 pp1-9 2003年3月

ⁱⁱⁱ 大戸美也子「横浜学園付属元町幼稚園「保育の見直し・1000日の実践記録」」1984年3月 フレーベル館

^{iv} 立浪澄子「保育カリキュラムをつくる」2000年 新読書社

^v 前掲ii p4

^{vi} 前掲i pp7-8

^{vii} 前掲ii p5

^{viii} 前掲ii p6

^{ix} 2003年5月23日園内研修議事録より